

図書館ニュース

Vol.34 , No.1 (2005.4)

図書館に行こう

細江文利

新入生の皆さん入学おめでとうございます。待ちに待った大学生活が始まり、これまでに経験したことのない新しい挑戦へと期待が膨らんでいることでしょうか。今どんな授業を受けていますか。希望を満たしてくれる課外活動は見つかりましたか。4月半ばになり、ちょっと落ち着いたところで学内を見渡してみると、今まで気づかなかったことがたくさんあるかもしれません。そんなとき図書館にも来てみませんか。

図書館に入るとまず目にとまるのがコンピュータでしょう。因みに図書館には、検索用パソコン49台、マルチメディアパソコン6台、情報処理センター端末20台等が設置されています。この数は他大学と比較して決して多い数ではありませんが、本学のデジタル情報サービスの特徴として、授業支援システム(E C R)の導入をあげることができるでしょう。図書館のホームページを開き、E C Rの項目をクリックすると、ここに登録されている授業科目について、シラバスや講義録、必読文献等

授業に関する情報を即座に検索することができます。このシステムを利用することによって、どんな面白い授業があるか、あるいはこれから受けようとする授業はどんなことを学ぶことができるか等、皆さんのカリキュラムづくりに役立つことと思います。

このように図書館では情報化の波が押し寄せ、運営・管理業務のコンピュータ化を始め、データベースの作成、電子ジャーナルやオンライン・データベースの導入など広範にわたっています。それは情報の伝達方法が、「紙の世界」から「電子の世界」へと転換していることを意味しています。

かといって貴重な文献や資料の保存役割を疎かにしているわけではありません。本学の図書館には興味深い大型コレクションや貴重な資料・文献が保存されています。その代表的なものの一つとして、「双六コレクション」をあげることができます。双六は、江戸期から明治期にかけて近世庶民教育および近世児童教育資料として

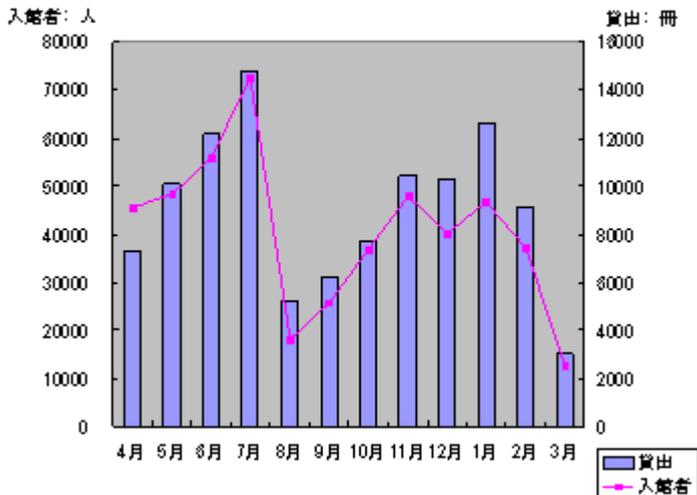
目次

図書館に行こう(細江文利)	1
新入生特集：図書館入門 - 先生・先輩からのメッセージ - (岩田重則 ほか)	3
へなちょこ教師の赤面読書遍歴(都留康子)	5
附属図書館の事業について<その2>(前学術情報部長 早瀬均)	6
ECRを使ってみよう(水島宏一)	9
お知らせコーナー	10
本学教員寄贈資料一覧	12

発行されたもので、97点からなり、それらから当時の世相を興味深く理解することができます。さらに、写真で示すように見事なものです。

また、師範教育にかかわる貴重なコレクションの一つとして「望月文庫」があります。望月文庫は、大正15年に東京府青山師範学校創立50年記念事業の一環として、師範教育に関係ある図書のコレクションが行われたものを、望月軍四郎氏らの好意によって設置されたものです。コレクションは、往来物、明治以来の初等教育教科書および教育書の7600冊以上からなっており、特に往来物は当時の教育のあり方を探ることができ、関係者に大きな関心を持たせています。そのほかにも、「松浦文庫」や「ルドルフ・シュタイナー文献コレクション」など、興味深い文献・資料がたくさん保存されています。

さて、図書館の利用目的は、文献・資料の探求からコンピュータ利用のため、あるいは居心地のよい学習スペースを求めてと、いろいろあることでしょう。いずれにしても、図書館利用の実態は、平日で一日平均およそ1800人以上の利用者があります。また、月別に利用者を見ると、表に示すように最高期の7月は73000人ほどの人が図書館を利用しています。7月期は、空調設備が整った快適な環境を求めてということもあるでしょうが、貸し出し冊数が多いことから、教員採用試験および学期末試験が図書館利用に反映しているといえるかもし



平成16年度入館者数・貸出冊数

れません。一方、12月・1月期は、卒論、修論作成および学期末試験等の要因が図書館利用の背景にあると予測されます。いずれにしても、年間でおおよそ48万人以上の人(延べ人数)が図書館を利用しているということです。これにデジタル情報サービス関連の利用者を加えると、大変な数字になることでしょう。大学の図書館はある面では、街に例えれば生活に欠かせない大型スーパー店みたいなものといっても良いかもしれません。その意味で、利用者のニーズにあったサービスのさらなる検討が必要かと思われます。皆さん図書館に買い物に来てみませんか。

(ほそえ・ふみとし 附属図書館長)



女子家庭双六 牧金之助刊 明治31(1878)年



新入生特集 ようこそ 附属図書館へ！！

図書館入門 - 先生・先輩からのメッセージ -

先生からのメッセージ

こんな便利な図書館はない。学大附属図書館にそんな気持ちでいてほしい。

学大附属図書館は一見何の変哲もない一大学図書館にすぎない。また、全国の大学図書館とくらべたとき、さほど大きな規模でもない。さらには、私の専門の民俗学の立場からすると、関係する蔵書も少ない。それでも、なおかつ、これほど便利な図書館はない。

学大附属図書館の使い勝手のよさ、そんなことがらを縷々述べてみよう。

誰でもそうであろうが、検索したい図書・論考・資料があれば、まず、附属図書館OPACから検索をかける。その網にかかればとりあえず問題はない。図書館へいき、図書によっては地下書庫へ入り閲覧あるいは貸出の手続をとる。

問題は“ない!!” 場合である。実は、私の専門からすると、むしろ“ない!!” 場合の方が多い。どうするか。

検索の窓口OPACのすぐ下Webcatで検索をかける。ほとんどの場合その網にひっかかる。その確認の上で、「学内向けサービス」欄の中の「図書借受依頼」「文献複写依頼」から申し込みをする。数日すると、私のレターケースに図書・論考・資料が入っている(学生は自分でとりにいくことになっているのでご注意ください)。緊急に必要である場合、Webcatの検索でひっかかった都内の大学図書館、国会図書館へ出むくこともあり、また、雑誌バックナンバー・禁帯出図書・マイクロフィルム閲覧など、直接いかなければならないこともある。しかし、こうした「図書借受依頼」「文献複写依頼」の充実、「相互利用」の飛躍的進歩のおかげで、私の場合、無駄な労力・時間の節約の上で、豊富な文献利用が可能となった。

正直に告白？すると、私の学大附属図書館利用は、この「相互利用」活用からはじまった。以前は、まだペーパーへの手書きの記入、途中から、書式(エクセル)をもらいメール添付で送りお願いしていた。おもしろいことに、この学外との「相互利用」をくりかえし利用しているうちに、丁寧にOPACで検索をかけると、学大附属図書館には

あながい豊富な蔵書があることもわかってきた。そして、「さてひと仕事」というと、このOPACと「相互利用」をフルに利用し、研究室のデスクの脇に文献とデータをならべ、パソコンのキー・ボードをたたきはじめる。つい数日前も、ひと仕事を終わり、附属図書館から借出していた大量の図書をよいしょよいしょと運び返却したところである。デスク脇をきれいさっぱり片づけるときの、この爽快感はなんともいえない。

こんなふうにして、いつのまにか、附属図書館にひんばんに出没する人間になってしまった。学大の教員の中では、現在、もっとも附属図書館を利用しているうちのひとりであろう。そんなふうにしてると、当然、図書館員の方々とも顔見知りとなり、ときには、文献検索についてデータベースやら検索のためのサイトなどなどご教示を受けることもある。もともとせっかちな性格だということもあり、あたふたと附属図書館をかけぬけることが多いのだが、図書館員の方々と会話をしたり、その仕事ぶりをながめたりするのも、楽しみのひとつとなってきた。

インターネットの急速な普及が大きな要因であることは間違いないのだが、実は、「相互利用」は国際的にも拡大しており(私はまだ国外との「相互利用」経験はない)、学大附属図書館は日本全国の図書館だけではなく、世界ともごく簡単につながっている。ちょっときどったいい方をすると、ミネルヴァのふくろう、それが身近にころがっている。これを利用するにこしたことはないではありませんか。

(いわた・しげのり)

人文科学講座 地域研究分野助教授)

いよいよ始まる大学生活。サークルに、バイト、勉強と期待でいっぱいだと思います。そんな皆さんの大学生活をより充実させるために、一卒業生として図書館の活用をお勧めいたします。

自分の教室がない大学生にとって、授業以外の空き時間をどう過ごすかは、ポイントです。大生やカフェで友達と、まったりするのもいいでしょう。しかし、たまには図書館で過ごすというのも渋いものです。別に勉強しろと言っているわけではありません。インターネットをしたり、CDを借りて音楽鑑賞にふけったりするのもいいでしょう。たっぷり時間があれば、ヒューマンドラマの映画を見て泣いてから授業というのもありだと思います。勉強する場所としてではなく、そういう気楽に立ち寄れる場所として図書館を活用してみたいはいかがでしょう。

もちろん、学生の本分である勉強面でも、図書館は欠かせません。大学の勉強は、与えられた問題集をこなせばよかった高校の勉強とは異なります。与えられた課題

小 岩 大

について自分で調べ、自分の考えを深めるのが、大学の勉強です。そのときに必要な資料を、図書館は提供してくれるのです。図書館は、いわば学生の学習の資源とってよいでしょう。知的資源としての図書館を積極的に活用し、知的好奇心をどんどん高めたいと思います。

最後に、図書館愛用歴6年の私が発見した図書館の穴場をお勧めしたいと思います。図書館でもっともよく活用する資料に教科書・指導書があります。教育実習時期になると実習生の間で、その争奪戦が繰り広げられるわけですが、そのとき見たい教科書をゲットできないということが多々起こります。そんなときのマル秘テク。書庫に入ってみましょう。書庫は、知る人ぞ知る全種類の教科書・指導書がそろう場所なのです。困ったときは、ぜひぜひ行ってみてください。

(こいわ・だい 大学院数学教育専攻 卒業生)



内 野 涉

正門をくぐると右手に見える大きな建物、学芸大附属図書館にはさまざまな文献がおかれています。学芸大学は教員養成大学としての機能を持っているので教育関係の図書や雑誌は充実しています。しかし、教育関係の図書を学生に提供するという以外にも多くの役割を図書館は果たしています。学芸大学には多くの留学生が日本人学生とともに勉強しています。図書館にもそのことが反映され、留学生用の図書コーナーがあり日本語テキストなども置いてあるので授業後には日本語や日本の習慣を勉強する留学生も目立ちます。授業で日本人学生と留学生が交流することもあります。図書館でもっと親密な交流することができるのです。同じ留学生同士や、日本人学生同士で大学生活を送ったとしても多くのことを得ることができると思いますが、違った文化の中で生活を送ってきた人とともに学ぶ機会が増えれば一層充実した学生生活を送れると思います。そのための道具として図書館を利用していくことも面白いのではないのでしょうか。

また、情報化社会のなかで、図書館の機能も充実してきており、情報検索用としてパソコンも数多く設置さ

れ、さらにノートパソコンを利用される方のための無線LANも設置されています。また、情報を得る道具が活字以外の電子メディアへと移行していく流れの中で、図書館でも活字以外のDVDなどの電子メディアによる情報提供も増加しているので、それを利用するのもよいでしょう。

学生生活を送っていく中で、さまざまな疑問にぶつかることがあると思いますが、答えのヒントはいろいろなところに転がっており、一見関係なさそうな事柄でも意外にヒントになったりすることがあります。図書館にも、ヒトであったり、文献であったり、電子メディアであったりと、使えばヒントになることが多くあると思います。講義を受け、自分の専攻分野の知識を増やしてゆくことも大切ですが、自分の専攻以外の知識を増やしてゆくこともとても意味のあることです。今後、充実した学生生活を送るための道具として、ぜひ積極的に図書館を使って行って欲しいと思います。

(うちの・わたる K類多言語多文化専攻 卒業生)



へなちょこ教師の赤面読書遍歴

都 留 康 子

学生さんが大学の先生に持っているイメージは、自由な時間がたくさんあってめちゃくちゃ本を読んでいるというものでしょうか。果たしてその実態は……。研究室を訪ねてきた学生の「先生、ここにある本、全部読んだんですか？」の一言に、「ままままあね」と冷や汗。恥ずかしながら、一冊の本を丸々読みきることが少なくなったなあというのが実感です。少なくとも“へなちょこ”の自分の場合、時間にも気持ちにもそうした余裕がなくなっているのかもしれない。私が専門にしている国際政治の分野では、日々刻々と動く世界情勢に、次々出版される本々本。乱読&積(ツン)読で、序章と終章、そして、重要そうなところを読んで、無理やり自己満足。もっと時間が欲しいといつも思います。

本当にじっくり本が楽しめたのはいつだっただろうと考えると、高校、大学時代という気がしてなりません。少しだけ私自身の読書遍歴をおってみましょうか。小学校の頃は、「赤毛のアン」と「若草物語」シリーズを読みふける夢見る少女でした(えっ!信じられない?)。今でも目にやきついているのは、角川書店からでていた文庫本の「若草物語」の表紙が本当に若草色だったこと。そして、同じオールコットの別シリーズがあると知ると、当時すでに絶版だったにもかかわらず、市内の本屋さんを探しまわりました。

中学時代は、学校に通うバスの乗り換え地点に大きな本屋さんがあり、江戸川乱歩シリーズはほとんど連日の立ち読みで読破。エラリー・クイーンの「Xの悲劇」「Yの悲劇」「Zの悲劇」、フリーマン・ウィルズ・クロフツの「樽」など、出版社の文庫目録を片手に買っては読みまくりました。今思うと、推理小説中毒状態だったような気がします。

そして、高校時代にかけて、映画の世界にもどっぷりつかかり、「ロードショー」「スクリーン」という2冊の映画雑誌を隅々まで読み、映画の公開日の早い「東京に行きたい」って真剣に思いました(私の住んでいた田舎では上映が数ヶ月遅れはザラ。そのかわり2本立てでしたが)。F.スコット・フィッツジェラルドの「華麗なる

ギャツビー」は映像がかもし出す刹那的で気だるい美しさに見せられて翻訳本を読み、英文の原作本まで手を伸ばしました。翻訳本片手に読む英文は嘘のようにすらすら読めて、「英語ができるかも」って大きな勘違いをしたものもこの頃です。

高校、大学時代の愛読書はなんと言ってもロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」。ベートーベンの自伝とも錯覚しかねるような音楽家の生涯、これでもかとふりかかる困難と挫折に不屈の精神で立ち向かうジャンを「またか」と醒めた目でみつつ、悩める時に青臭くも何か勇気をもらえるような気がして、何度ページをめくったかわかりません。

そして、今、私が読書を思い切り楽しめるのは、旅行中です。仕事と偽って?海外に行くと、ベッドに入って仕事の本を開くと30秒とたたずに寝てしまうのに、その地にゆかりのある本を手にとると時代が違っても自分がその地に足を踏み入れているという心地よい興奮の中で、“眠れない夜”になります。インドに行った時は遠藤周作の「深い河」、ドイツには森鷗外の「舞姫」。そしてついこの間フランスにいった時は、いまさらながらフランソワ・サガンの「悲しみよこんにちは」とエミール・ゾラの「居酒屋」。オンフルールという街からパリに帰ったその日、前日にまさしくオンフルールでサガンが亡くなっていたことを知り、同じ空の下にいたことに不思議な感動を覚えました。

さてさて、まことにとりよめのない話を書きつらねた挙句の結論は? 確信的に言えることは、気力、体力、集中力、そして、時間、どれをとっても大学時代がピークということ。そう、だから? これ以上書くのはあまりにも無粋というものでしょう。

(つる・やすこ 人文科学講座 社会システム助教授)

附属図書館の事業について < その2 >

早瀬 均

はじめに

附属図書館の事業については、『東京学芸大学附属図書館の現状と課題』(平成15年3月刊 以下『現状と課題』という。)のなかで提示した諸課題について、それぞれ実施計画を策定した上で、解決を図っていくことを中心に取り組んでいる。課題のいくつかは、平成16年度の年度計画に反映されていることから、今年度の事業計画には、中期目標・中期計画における年度計画も含まれている。前回(図書館ニュース Vol.32, No.2)と同様に、今年度の事業計画の主な事項とその進捗状況について紹介することにしたい。

学術情報・資料の整備

1) 学術研究コンテンツの整備

電子ジャーナルを中心とする学術研究コンテンツの整備については、平成16年度年度計画において「安定的な導入を図るため、共通経費の確保に努める」、「人文社会科学分野の電子ジャーナルを充実する」と具体的な計画を立てた。

電子ジャーナルの価格モデルは、基準年が設定され、その年の購読額を維持することが条件となっている。すなわち、基準年に購読していたタイトルを継続して購読することが前提条件とされているわけである。しかし、もし研究室等で雑誌の購読中止が出れば、購読タイトルが減ることになり、購読雑誌だけでは、基準年の購読額を維持することができなくなる。この場合は、差額分を別途経費を補填することで対応しなければならないが、本学の場合、その補填に図書館の資料購入費を当ててきた。しかし、雑誌価格の値上げと研究室等における購読中止が続いたために、補填経費が膨らみ、平成16年には、ある出版社について補填のための経費が購読額をはるかに上回り、他の資料購入費への圧迫が一層進むことになった。平成17年度にはさらに多くのタイトルが中止されることがわかり、このままでは電子ジャーナルの導入を中止する判断をせざるを得ない状況に到達しまっ

た。一方、このような危機的状況と拡大する学術研究デジタルコンテンツを背景として、研究者からは、中核的な学術雑誌を含む電子ジャーナルの維持・拡大と新たなデータベースの導入等について切迫した要望が図書館に寄せられた。

そこで図書館では、現状の学術研究コンテンツ整備の問題点及び学術研究コンテンツは、各研究者や研究室単位での導入ではなく、大学として整備する必要があること、そのための経費を共通的な経費として確保する必要があること、重複の排除や電子版への移行等による経費の節減を徹底すること等を「東京学芸大学における学術研究コンテンツの整備・充実について ~平成17年度以降の対応~(提案)」にまとめ、附属図書館委員会で審議して頂いた。その上で、附属図書館長と教育学研究科長の連名により、学長、理事に要望書として提出した。その結果、方向性について、ほぼ理解を得ることができ、さらに今年度分として電子ジャーナル対応のための追加経費を頂くこともできた。図書館では、平成17年以降の整備を前提としてこの経費を使うこととし、Elsevier社のScience Direct等の維持と新たにWiley社、Blackwell社、及びCambridge大学出版会の電子ジャーナルとProQuest社のAcademic Research Library及びアメリカ心理学会刊行物の全文データベースであるPsycARTICLEの導入を決めた。これによって、利用可能な電子ジャーナルは約6,000タイトルを超え、人文社会科学分野の電子ジャーナルも充実される目処がついた。平成16年度の年度計画は達成されたと言ってよいと思われる。

データベースについては、NACSIS-IRの機関別定額制、化学分野のSciFinder Scholarと雑誌評価のJournal Citation Reportを導入した。いずれも研究者から要望の強かったものである。

図書館では、これらの学術研究コンテンツを充分活用して頂くために、今後利用講習会・説明会を頻繁に開催したいと考えている。

2) 学生用図書(附属図書館備付図書)の整備

附属図書館備付図書の受入冊数は、平成9年度以降減り続け、平成12年度には、3,000冊を下回ってしまった。これは学生1人当たりになると0.5冊しか整備されていないことになり、常に学生から新刊書が少ないとの不満が寄せられる要因と考えられた。そのため、平成15年度以降は学生用図書の充実を図ることを重要課題とし、その結果、平成15年度に図書館配架分の受入冊数は、学生一人当たり1冊まで回復した。平成16年度は、年度計画として「シラバスと『共通科目のための読書案内』に掲載された図書をすべて整備する」ことを挙げ、実施した。今年度の受入冊数は、まだ2か月を残すが、平成15年度とほぼ同じとなっている。

利用者サービスの改善

1) サービスカウンタの整備

昨年4月から、それまで2階にあったレファレンスデスクを1階の貸出カウンタの並びに移動し、貸出カウンタとレファレンスデスクが共同して利用者サービスに対応できるようにした。これは以下のサービス改善を目指したものである。

サービスカウンタ周辺の整備

情報サービス課の事務を3階に移すことにより、カウンタ周りを整理し、閲覧スペースをもっと見通しのよい空間にする。

レファレンスデスクにおける利用者支援の強化

視聴覚資料と館内貸出用PCの利用時間の拡大

2階の事務室内に配架していた視聴覚資料を1階閲覧室に移すとともに、9時～17時までだった利用時間を土曜・日曜日を含めて開館時間であればいつでも利用可能とする。館内貸出用PCについても同様の措置をする。

相互貸借資料の引渡時間の拡大

他大学に依頼した文献複写物等を貸出カウンタにおいて開館時間内であれば受け取り可能とする。

これらを実施した効果は大きく数字に現れている。すなわち、レファレンスデスクで受付けた質問・相談件数は、1月末現在で昨年度全体の5割増となった。レファレンスデスクを利用者にとって便利な位置に配置したことの効果であると思われる。

また、視聴覚資料の利用件数も増えており、1月末で昨年度の約2倍、館内貸出用PCの利用件数も約2.2倍

と昨年度の約2倍となった。利用時間の拡大がニーズを引き出したものと考えられる。

2) ドキュメント・デリバリ・サービス

昨年4月から開始した新しいサービスである。キャンパス内限定の研究者向サービスで附属図書館配架の資料について文献複写のリクエストを受け、該当文献を研究者のもとに送付するサービスである。詳しくは、図書館のホームページをご覧ください。

3) 電子的授業支援サービス(ECR)

昨年6月から試行を開始した新しいサービスである。ECRはElectronic Course Reserveの頭字語で、教員が授業のなかで学生に指示する授業関連情報(必読文献、講義録、シラバス、レポート課題、試験問題等)を蓄積し、学生がインターネットを介してアクセスできる仕組みを提供するサービスである。教員にとっては、文献等の指示が効率的に行える、資料の複製・配布の手間が省ける、学生への連絡事項も掲載できる等の利点、学生にとっては、授業で指示された情報が即座に入手できる、予習・復習が効率的に行える等の利点がある。平成17年2月現在で、29の授業と約350の授業関連情報が登録されている。(http://ecr.u-gakugei.ac.jp)平成17年度からは本格運用を開始する計画である。

なお、ECRは、e-reserveのポータルサイトに、我が国で最初の実施例として紹介されている。*1

4) 研究室図書を含む資料の全学的利用

この課題も、年度計画に「図書・雑誌の学内共同利用の方策を検討する」との目標を掲げ、検討を進めたものである。資料の共同利用についての課題は、研究室等に特別貸出されている図書の共同利用である。図書館利用規則では、特別貸出図書についても、できるかぎり他の利用者の利用に応ずることがうたわれている。特別貸出図書は、講座・分野等の図書室に配架されているものと各教員個人に貸出しているものがあるが、先ず各学系の図書館連絡委員の先生にお願いして、それぞれの講座・分野に設置されている図書室の実態調査を行った。その結果、殆どの図書室において本学構成員が閲覧、複写、貸出の少なくともいずれかを利用できることがわかった。

図書館では、この調査結果に基づき図書室と研究室に特別貸出をしている資料の全学的な利用のルールを作成

し、本年度第3回の附属図書館委員会で審議して頂いたところである。今後各学系からの意見を聴取の上、必要があれば修正を加えて、ルール化を図りたいと考えている。

情報化の推進

1) 教科書の遡及入力

本学は、明治期以降の教科書を数多く所蔵しており、特色あるコレクションを形成している。すでに、その大部分はE-TOPIA(教育系電子情報ナビゲーションシステム)で検索できるようになっているが、全国的な共有データとするために、国立情報学研究所(NII)との共同事業として総合目録データベースへの登録を開始した。この事業によって教科書目録の核が形成され、他の大学図書館による教科書データの入力が進むことになれば、全国的な教科書の共有化が期待できる。この事業については、平成17年度も継続申請をしている。

2) 「学術機関リポジトリソフトウェア実装実験プロジェクト」への参加

リポジトリとは、デジタル化された情報資源を永続的に保存し、情報発信する仕組みをいい、学術機関リポジトリは、大学等の学術機関が、所属する研究者等の研究成果を機関として保存し、発信することによって、社会に対する顕在性(visibility)の向上や説明責任を果たすことを目的としている。本学においても、「研究成果を教育界及び教育関連産業等へ還元する」ことを中期目標にかかげており、その具体的な対応策のひとつと考えられるものである。

標記プロジェクトは、国立情報学研究所と本学を含む6国立大学図書館(北海道大学、東京大学、東京学芸大学、千葉大学、名古屋大学、九州大学)が共同して推進してきたものである。図書館では、このプロジェクトのなかで、実験的にリポジトリシステム*2を構築し、NIIとのソフトウェア連携の検証等を行ってきた。現在は、すでにE-TOPIAで公開している紀要記事等のデータを蓄積し、画面表示の日本語化等の実験を続けている。今後は、システム要件の再チェック、他の学内システムとの整合性の検証等を行った上で、試行にもっていければと考えている。

3) 無線LANの拡充

PC必携化に伴う情報利用環境整備の一環として、閲

覧室に無線LANのアクセスポイントを増設した。これによって閲覧室の全域において無線LANに接続できるようになった。

管理運用・社会貢献

1) 総合メディア機構の設置

今後の図書館活動のあらたな枠組みとして、平成17年度から総合メディア機構が設置されることになった。総合メディア機構は「図書館と情報処理センターを機能統合し、総合メディア機構(仮称)を検討し、設置する。」という中期計画に基づき、今年度プロジェクトを立ち上げて、設置について検討を進めてきたものである。プロジェクトによる検討の過程で、機構は、図書館と情報処理センターの機能統合に止まらない本学の情報化及び情報基盤整備に関わる取り組みを一元化する枠組みとして位置付けられた。図書館は、機構のなかの中核組織として、他の構成組織と協働しながら、学術情報基盤の整備を進める。

2) 資料展示会と記念講演会の開催

平成15年度から学園祭の時期にあわせて資料展示会と記念講演会を開催している。平成16年度は、「教科書・双六からみた文明開化」というテーマを設定し、新収資料を含む約60点の資料を展示した。また、記念講演会では、本学総合教育科学系の橋本美保助教授に講師をお願いし、「明治初期の子どもと学校」と題した講演して頂いた。結果は頗る好評で、今後もさらに内容を充実しつつ継続していきたい。

その他『現状と課題』の中で示した事項として実施したものに、韓国の大学図書館との文献複写サービスの開始による国際相互貸借活動の拡大、自動貸出装置の導入による業務の効率化、受入業務の迅速化、研究室貸出(特別貸出)図書への請求記号の付与等が挙げられる。

*1 http://www.mville.edu/Administration/staff/Jeff_Rosedale/

*2 MITの図書館とHPで共同開発されたDSpaceというオープンソースソフトウェアを採用している。

(はやせ・ひとし 前学術情報部長)

ECR を使ってみよう！

水 島 宏 一

まず、ECR (Electronic Course Reserves : 電子的授業支援サービス) とは、東京学芸大学のホームページの附属図書館をクリックして見ていただければ、大体の概要がわかるかと思しますので、ここでは簡単にどんな利用方法があるのかを説明することにします。ECRは、附属図書館から指定された ECR 専用のサーバーに各教員が授業関連情報や授業資料を電子ファイル化 (ワード、エクセル、PDF、映像など) し、転送しておくことによって、学生が事前に授業資料を手に入れることができるシステムのことをいいます。

このシステムの利点は、まず教員側からすると授業資料を印刷する必要がなくなることによって、配付資料を印刷するという手間がなくなると同時に印刷代 (コピー用紙含む) のコスト削減にもつながります。また、事前に毎回講義前に ECR のチェックを必ずしておくように学生へアナウンスすることによって、レポート課題や講義の予習などを課すことができます。さらに、講義を欠席した学生に対しても講義に出席した学生と同じ授業資料を提供することができ、課題などについても欠席した学生本人が ECR を利用して情報を収集することができます。

この ECR というシステムは、大学からだけでなく、自宅あるいは出張先からでも授業資料を転送することができます。

次に学生側からすると、授業資料をうっかり自宅に忘れた場合でも、大学で即座に手に入れることができます。また、授業資料を大学内だけでなく、大学外 (自宅、遠征先 : 海外など) でも手に入れることができます。これによって、やむを得なく講義を欠席する場合にでも、ECR を利用して欠席した日の授業資料を手に入れ、学生自身で勉強することも可能です。さらに、ECR の資料は学生自身の PC に直接ダウンロードすることもでき、学生自身で授業資料をわかりやすく編集することもできます。

このように教員だけでなく学生に対しても非常に利点のあるシステムです。また、学生 (1 年生 ~ 3 年生) の

ノート型 PC の必携化を考えても、このようなシステムを利用することによってノート型 PC の汎用性も広がり、さらに e ラーニングへの足がかりにもつながります。今や教育界では、IT 授業実践がいろいろな分野で取り入れられていることを考えると、教員養成大学の基幹大学である東京学芸大学の教員や学生がこのシステムを利用することは当然のことでしょう。

最後に、私自身 ECR を使用して感じたことは、前述したように授業資料などの印刷、あるいはその資料を講義棟まで持っていく手間が省けたり、学生への連絡が周知徹底できたりと非常に便利でした。しかし、受ける側である学生のほとんどが、ECR というシステムの存在すら知らないため、どうすれば資料を手に入れることができるのか戸惑っていました。せっかくのシステムなので、何らかの方法で学生全体にアナウンスできれば、もっと使用頻度が広がるのではないかと感じました。

ECR の利用方法、内容等については、東京学芸大学ホームページの附属図書館をクリックし、附属図書館のサイトに入り、ECR 電子的授業支援サービスをクリックして読んで下さい。



(みずしま・こういち

健康・スポーツ科学講座 運動学分野助教授)



お知らせコーナー

平成 17 年度から利用できる電子ジャーナルを拡大しました！

先生方からの強い要望を受け、附属図書館では電子ジャーナルの導入拡大を実施しました。平成 17 年 4 月から利用できる電子ジャーナルは次の通りです。ぜひご活用ください。

- Science Direct
 - Arts and Sciences I Collection (JSTOR)
 - Blackwell Synergy *
 - Cambridge Journals Online *
 - Wiley InterScience *
 - Academic Research Library *
 - Professional Development Collection
 - PsycARTICLES (EBSCO) *
- (* 平成 17 年度から新規導入の電子ジャーナル)

平成 17 年度附属図書館 講習会スケジュール



附属図書館ではみなさんの学習・研究活動を支援するために、平成 17 年度も各種メニューを取り揃えて講習会を開催します。みなさんの参加をお待ちしています！！

お問い合わせ先（書庫利用講習会を除く）：附属図書館 1 階 レファレンスデスク

TEL 042-329-7223 / E-mail libref@u-gakugei.ac.jp

新入生のための図書館オリエンテーション

4 月 11 日(月)～15 日(金)の 5 日間、次のスケジュールで実施します。

	10:30～	14:30～	16:10～	18:00～
11 日(月)	○	○	○	○
12 日(火)		○	○	
13 日(水)		○		○
14 日(木)		○	○	○
15 日(金)		○	○	

図書館内を廻りながら、資料の配置や利用方法などについて約 40 分程度でご案内します。書庫利用講習会を兼ねています。

附属図書館 1 階正面らせん階段の前に集合しましょう！

電子ジャーナル講習会

前期は 5 月中旬～6 月、後期は 10 月～11 月に開催予定です。本学で利用できる電子ジャーナルについて、提供会社別に数回に分けて実施します。各回とも基本的事項や検索方法などを実習を交えながら説明します。

文献の探し方オリエンテーション

学芸大 OPAC や Webcat、雑誌記事索引の利用法を中心に、文献の探し方や入手方法の基礎について実習を交えながら説明します。

実施日程：<前期> 5 月 10 日(火)～6 月 30 日(木)
<後期> 10 月 25 日(火)～11 月 25 日(金)
各回 10:30 から 60 分程度です。

月曜日、土・日・祝日を除き実施します。

参加方法：参加は予約制です。レファレンスデスクにお申し込みください。

書庫利用講習会

書庫利用の手続き、書庫内資料の配置、電動書架の操作方法、利用のマナーや非常時の対応について 15 分程度で説明します。予約制により、平日 10:00～10:15、16:15～16:30 に開催します。

お問い合わせ先：附属図書館 1 階 貸出カウンター

TEL 042-329-7225

E-mail etsuran@u-gakugei.ac.jp

最新情報はホームページで...

講習会の情報は、ホームページからお知らせしています。

<http://library.u-gakugei.ac.jp/seminar/seminar.html>

電子ジャーナル検索ページが使いやすくなりました！

学内で利用できる電子ジャーナルが、2005年から大幅に増加しました。契約誌にフリージャーナルを加えると、7000タイトル以上になります。

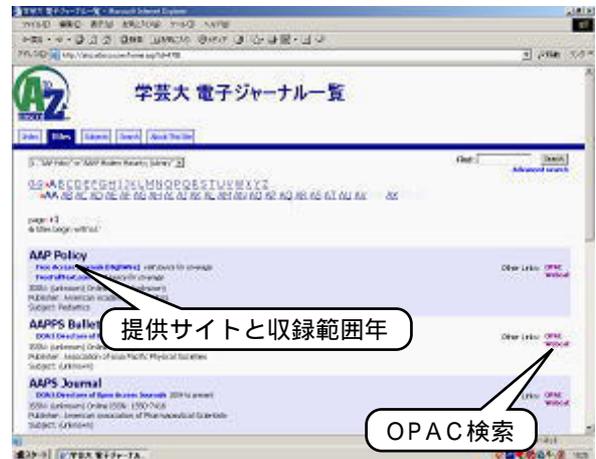
このたび、電子ジャーナル検索ページを一新し、より使いやすい「学芸大 電子ジャーナル一覧(AtoZ)」*としました。

新しい検索ページには、学内で利用できる電子ジャーナルを和文誌も含めて統合的に検索できる、誌名・誌名のABC順リスト・提供サイト別リストから検索できる、という従来からの機能に加えて、主題別リストが提供される、学芸大 OPAC や Webcat など他のデータベースにリンクしている、電子ジャーナルの追加・リンク先や収録範囲年等の変更が迅速にメンテナンスされる、といった利点があります**。

の主題別リストは、ご専門やご関心に合わせ利用されると、新しい発見が得られるのではないのでしょうか。例えば、収録範囲年以外の図書館所蔵を確認するという使い方ができます。

【利用上の注意】

0. 東京学芸大学のネットワークの外からは、契約誌のほとんど全てが本文にアクセスできません。(フリージャーナルは本文にアクセスできます)
1. タイトルの下に、提供サイトと収録範囲年が表示されます。収録範囲年以外の本文にはアクセスできません。
2. 同じタイトルで、提供サイトが複数あることもあります。多くの場合、収録範囲年や利用画面が異なりますのでご注意ください。
3. 和文誌は、誌名のABC順リストでは、便宜上「0-9」に配列しています(五十音順)。
4. 学芸大OPACをリンク検索する場合は、「学芸大 電子ジャーナル一覧 (AtoZ)」に記載されている冊子体のISSN***で自動的に検索されます。ISSNのない一部の雑誌はエラーになりますので、他の項目で検索し直してください。



電子ジャーナル検索ページ
<http://atoz.ebsco.com/home.asp?id=tgul>
 (附属図書館ホームページからアクセスできます)

(注)*EBSCO 社 A-to-Z サービスを導入しています。
 **ISSN (国際標準逐次刊行物番号) から検索できます。
 ***ISSN とは、国際的な 8 桁の雑誌コードです。

マナーを守って 気持ちよい図書館ライフを！

図書館は私たちの共有財産です。図書館を気持ちよく利用できる環境づくりにご協力ください。

- ・利用した資料はもとの場所に返しましょう。
- ・館内での飲食や喫煙は禁止です。
- ・携帯電話は電源を切りましょう。
- ・館内では静かに。
- ・貴重品は常に携帯しましょう。



本学教員寄贈資料紹介

平成16年度に本学教員より寄贈を受けた資料を紹介いたします。(敬称略、所属学系・講座順、寄贈者五十音順)

総合教育科学系

大河原美以(教育心理学講座)
「怒りをコントロールできない子の理解と援助」
大河原美以著(金子書房, 2004)

人文社会科学系

石井正己(日本語・日本文学研究講座)
「遠野からの発信」石井正己編(東京学芸大学言語文学第一学科学典文学第四研究室, 2004)

黒石陽子(日本語・日本文学研究講座)
「『少女の友』とその時代」遠藤寛子著(本の泉社, 2004)

高橋忠彦(日本語・日本文学研究講座)
「日本語と辞書 第9輯」古辞書研究会, 2004
「御伽草子精進魚類物語 本文・校異篇」高橋忠彦, 高橋久子, 古辞書研究会編著(汲古書院, 2004)
「御伽草子精進魚類物語 研究・索引篇」高橋忠彦, 高橋久子, 古辞書研究会編著(汲古書院, 2004)

根本正義(日本語・日本文学研究講座)
「生活実感から感性を育てる言葉」根本正義著(らくだ出版, 2003)
「心を耕す生活にねざした言葉」根本正義著(らくだ出版, 2003)
「いつくしむこころ:根本正義教育随想」根本正義著(書肆楽々, 2004)
「校長徒然譚」根本正義著(書肆楽々, 2004)
「子ども文化にみる綴方と作文」根本正義著(KTC 中央出版, 2004)

井ノ口哲也(人文科学講座)
「荀子/荀子(撰)(新書漢文大系:25)」藤井専英(訳)著;井ノ口哲也編(明治書院, 2004)

君島和彦(人文科学講座)
「韓日共同歴史教材案の検討第12回」(歴史教科書研究会, 2002)
「日本と韓国の歴史共通教材をつくる視点」歴史教育研究会編(梨の木舎, 2003)
「近くて近い国へ:日韓司教交流会資料集:1996-2001」
「日韓歴史教科書シンポジウム第13回」(歴史教育研究会, 2003)
「日韓歴史教科書シンポジウム第14回」(歴史教育研究会, 2004)

鈴木健之(人文科学講座)
「愛華」(亜州友好協会, 2004年1-2月, 11-12月)

村松泰子(人文科学講座)
「ジェンダー問題と学術研究」原ひろ子[ほか]編(ドメス出版, 2004)
「理科離れしているのは誰か」村松泰子編;河野銀子ほか著(日本評論社, 2004)
「F-GENS ジャーナル」1-2(2004)

自然科学系

福地昭輝(基礎自然科学講座)
「日本理科教育学会第42回関東支部大会研究発表要旨集」(2003)

芸術・スポーツ科学系

朝倉隆司(養護教育講座)
「がん患者と家族のためのサポートグループ」
デイヴィッド・スピーゲル, キャサリン・クラッセン著;朝倉隆司ほか訳(医学書院, 2003)

小川知二(美術・書道講座)
「常陸時代の雪村」小川知二著(中央公論美術出版, 2004)

久保田慶一(音楽・演劇講座)
「孤高のピアニスト梶原完」久保田慶一著(ショパン, 2004)

中島裕昭(音楽・演劇講座)
「学習者中心の外国語教育をめざして」板山真由美ほか編(三修社, 2004)
「彼ら抜きでいられるか」ハンス・ユルゲン・シュルツ編;山下公子ほか訳(新曜社, 2004)

施設・センター

大伴潔(教育実践研究支援センター)
「障害者の発達と教育・支援」菅野敦ほか編(山海堂, 2003)
「神経心理学」 Vol.6-19(1990-2003)
「失語症研究」 Vol.11-22(1991-2002)
「高次脳機能研究」 Vol.23(2003)
「小児保健研究」 52(3,5-6), 53(1,3-5), 54, 55(1,3-6), 56, 57(1-5), 58, 59(1,3-6), 60(1-2,5-6), 61-62, 63(1-3)(1993-2004)

西村俊一(国際教育センター)
「孔子傳」銭穆著;池田篤紀訳(アジア問題研究会, 1975)
「人心と人生」梁漱溟著;景嘉校訂;池田篤紀訳(アジア問題研究会, 1987)

見世千賀子(国際教育センター)
「諸外国の外国人学校政策」西村俊一, 岡田[昭]人編著(東京学芸大学国際教育センター, 2004)
「大学と教育現場の連携のあり方を探る」齋藤ひろみ編(東京学芸大学国際教育センター, 2003)

資料をご寄贈ください

附属図書館では、蔵書をよりいっそう充実させるために、資料のご寄贈をお願いしています。

とりわけ本学関係者(教員・卒業生等)による著作物や、本学内で刊行された紀要や報告書類などは、網羅的に収集することが望ましく、特にご協力いただけますようお願いいたします。

なお、本学附属図書館で既に所蔵しているもの、附属図書館の蔵書構築方針に合わないものは、受入ができない場合がありますので、何卒ご了承いただきたく存じます。

ご協力よろしく願いいたします。

編集発行 東京学芸大学附属図書館

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1
TEL 042-329-7223 / FAX 042-329-7226

URL <http://library.u-gakugei.ac.jp/>
携帯版 URL <http://library.u-gakugei.ac.jp/i/>